

廿九日の牡丹餅

岡本綺堂

青空文庫

六月末の新聞にこんな記事が発見された。今年は暑気が強く、
悪疫あくえきが流行する。これを予防するには、家ごとに赤飯を炊たいて
食えと言い出した者がある。それが相当に行われて、俄かに赤飯
を炊いいて疫病やくびょうよけをする家が少くないという。今こんにち日でも東
京のまん中で、こんな非科学的のお呪まじない禁めいたことが流行する
かと思うと、すこぶる不思議にも感じられるのであるが、文明国
と称する欧米諸国にも迷信はある。いかに科学思想が発達しても、
人間の迷信は根絶することは許されぬのかも知れない。

それに就いて、わたしはかつて故老から聞かされた江戸末期のむかし話を思い出した。

それは安政元年七月のことである。この年には閏うるうがあつて、七月がふた月つづくことになる。それから言い出されたのであろうかとも思われるが、六月から七月にかけて、江戸市中に流言が行われた。ことしは残暑が長く、殊に閏の七月は残暑が例外に強い。その暑気をふせぐには、七月二十九日に黄粉きなこの牡丹餅をこしらえて食うがよい。しかしそれを他家へ配つてはならない、家内親類奉公人などが残らず食いつくすに限る。そうすれば決して暑気あたりの患わざらひいはないというのである。

勿論その時代とても、すべての人がそれを信用するわけではな

く、心ある者は一笑に付して顧みなかつたのであるが、そういうたぐいの流言は今日より多く行われ、多く信じられた。しかもその日は二十九日と限られ、江戸じゅうの家々が一度に牡丹餅をこしらえる事になったので、米屋では糯米が品切れになり、粉屋では黄粉を売切ってしまった。自分の家でこしらえる事の出来なものは、牡丹餅屋へ買いに行くので、その店もまた大繁昌であった。

「困ったね。どうしたらよかろう。」

女にしては力んだ眉をひそめて、団扇を片手に低い溜息をついたのは、浅草 金龍 山下に清元の師匠の御神燈をかけてい

る清元延津弥のぶつやであつた。延津弥はことし二十七であるが、こういう稼業にありがちの女世帯で、お熊という小女こおんなと二人暮しであるために、二十九日の朝になつても、かの牡丹餅をこしらえるすべがない。あいにく近所に牡丹餅屋もない。

こうと知つたら、きのうのうちに三町ほど先の牡丹餅屋にあつらえて置けばよかつたが、まさかに売切れることもあるまいと多寡たをくくつていたのが今更に悔まれた。遊芸ゆうげいの師匠であるから、世間の人よりも起きるのがおそい。お熊が朝の仕事を片付けて、それから牡丹餅を買いに出ると、店は案外の混雑で、もう売切れである断られた。お熊は手をむなしくして帰つて来ると、延津弥は顔をしかめた。こうなると自然の人情で、どうしても牡丹餅

を食わなければならぬように思われて来た。世間の人たちがそれほど競つて食うなかで、自分ひとりが食わなかつたならば、どんな禍わざわいを受けるかも知れないと恐れられた。

「ほかにどこか売っている家はないかねえ。」

金龍山の牡丹餅は有名であるが、ここはしよせん駄目だめであろうと、かれらも最初から諦めていたのである。しかもこの上はともかくも金龍山へ行つてみて、そこでお断りを食つたらば、広小路の方へ行つて探してみたらよかろうということになった。

「暑いのお気の毒だが、急いで行つて来ておくれよ。また売切れてしまうと困るから……。」と、延津弥は頼むように言った。

「はい。行つてまいります。」

お熊は直ぐに出て行つた。けさももう五つ半（午前九時）過ぎで、しょうでん 聖天の森では蟬の音が暑そうにきこえた。正直な小女は日傘もささずに、金龍山下かわらまち 瓦町の家をかけ出して、浅草観音堂の方角へ花川戸の通りを急いで来ると、日よけの扇を額にかざした若い男に出逢つた。男は笑いながらお熊に声をかけた。

「暑いのに大急ぎで……。お使かえ。」

「おはぎを買いに……。」と、お熊は会えしやく釈しながら答えた。

「ああ、そうか」と、男はまた笑つた。「わたしも家で食べて来た。まだ口の端はたに黄粉が付いているかも知れねえ。」

手の甲で口のまわりを撫でながら、男はやはりにやにや笑つていた。たわらまち 田原町のじゃこつ蛇骨長屋のそばに千鳥という小料理屋がある。

彼はその独り息子の長之助で、本来ならば父のない後の帳場に坐っているべきであるが、母親の甘いのを幸いに、肩揚げのおりないうちから浄瑠璃や踊りの稽古所ばいりを始めて、道楽の果てが寄席の高坐にあがるようになった。彼は落語家はなしかの円生の弟子になつて千生せんしやうといふ芸名を貰つていたのである。実家が相当の店を張つていて、金づかいも悪くないお蔭に、千生の長之助は前坐の苦を早く抜け出し、芸は未熟ながらも寄席芸人の一人として、どうにか世間を押廻しているのであつた。

千生はことし二十三で、男振りもまず中くらいであるが、磨いた顔を忌いやにてかてかど光らせて、眉毛を細く剃りつけ、見るから芸人を看板にかけているような気障きざな人じん体ていであつたが、工面くめんが

悪くないので透綾すきやの帷子かたびらに博多の帯、顔ばかりでなしに身装みなりも光っていた。

「もう遅いぜ。内でこしらえた人は格別、店で買おうという人は、みんな七つ起きをして押掛けていくくらいだ。今から行つたつて間に合うめえ。お気の毒だがお熊ちゃん、遅かりし由良之助だぜ。」

「そうでしようねえ。」と、お熊はまじめでうなずいた。「実は今戸の方へ行つて断られたんですよ。」

「そうだろう。今頃どこへ行つても売切れさ。いずこも同じ秋のゆうぐれで仕方がないね。」

「でも、まあ、念のために行つてみましょう。」

別れて行こうとするお熊を、千生は又よび留めた。

「いや、お若けえの、待つて下せえやし。と、長兵衛を極めるほどの事でもねえが、見すみす無駄と知りながら、汗をたらして韋駄天は気の毒だ。ここに一つの思案あり。まあ聞きたまえ。」と、彼は芝居気取りでお熊の耳にささやいた。

と、いつても、それは差したる秘密でもなく、これから方々の菓子屋や餅屋をさがして歩くまでもなく、わたしの家へ行つて訊いてみる。まだ食い残りがある筈であるから、そのわけを話して師匠とおまえの二人分を貰つて来いというのであつた。

前にもいう通り、千生の家は小料理屋で母のお兼のほか料理番や女中をあわせて六、七人の家内であるから、きよようの牡丹餅

も相当にたくさん拵こしらえたのである。千生はそのお初を食って直ぐに出たのであるから、早く行けば幾らか分けてもらえるに相違ない。急げ、急げと千生は再び芝居がかりで指図した。

「ありがとうございます。では、そうしましょう。」

お熊はよろこんで駈けて行つた。千生は一体どこへ行くつもりであつたのか知らないが、俄かに思い付いたようにほほえみながら、金龍山下の方角へ足をむけた。彼は延津弥の家の前に立停まつて馴れなれしく声をかけた。

「師匠、内ですかえ。」

広くもない家であるから、案内の声はすぐに奥にきこえて、延津弥は入口の葭戸よしどをあけた。

「あら、千生さん。」

「お邪魔じゃありませんか。」

「いいえ、どうぞお上がんなさい。」

かねて識っている仲であるので、千生はずっと通って何かの世間話をはじめた。千生の肚はらでは、こうして話し込んでいるうちに、お熊が帰って来て、このおはぎは千生さんの家から貰ったと言え、延津弥もよろこぶに相違ない。自分の顔もよくなるわけである。恩を売るといふほどの深い底意はなくとも、師匠の口から礼の一つも言われたさに、彼はわざわざここへ訪ねて来たのであった。途中でお熊に出逢ったことを彼はわざと黙っていた。

やがてお熊が帰って来たので、延津弥は待ちかねたように訊い

た。

「お前、あつたかえ。」

「どこも売切れだといふので、千生さんの家へ行つて貰つて来ました。」

「千生さんの家……。千鳥さんへ行つて、お貰い申して来たの。あら、まあ、どうも済みません。」

と、延津弥は繰返して礼を言った。

我が思う壺にはまつたので、千生は内心得意であつた。

千生はそれからこはんとぎ小半時ほども話して帰ると、入れちがいみそかに今戸の中田屋という質屋の亭主金助が来た。金助は晦日みそかまで、蔵くら前らまえ辺に何かの商売用があつて出て来たついでに、延津弥の家へちよつと立寄つたのである。表向きは独り者といつても、延津弥がこうした旦那の世話になつてゐるのは、その当時において珍しいことでもなかつた。

金助は二階の六畳へ通された。きようは晦日のお手当を持つて来たのであるから、延津弥は取分けて愛想よく彼を迎えた。かれはお熊に言い付けてかの牡丹餅を持ち出させた。

「ああ、ここにも牡丹餅があるね。きようは内でも食わされた。」と、金助は笑つた。

「まあ、ここのも一つ食べてください。まさかに毒もはいつてい
ませんから。」

女にすすめられて、金助はその牡丹餅を一つ食った。延津弥も
食った。晦日まえで忙しいというので、金助は長居もせず^に帰つ
た。事件はこれから出^{しゅつ}来^{たい}したのである。

金助はそれから二、三カ所の用達しを済ませて、その日の七つ
(午後四時)ごろに今戸の店へ帰ったが、途中から胸が苦しくな
って、わが家へころげ込むと共に倒れた。家内の者もおどろき騒
いで、すぐに近所の医者呼びにやると、医者は暑気あたりの霍^か
乱^{くらん}であろうと診察した。そういうことのない呪^{まじない}禁に、きよう
は黄粉の牡丹餅を食ったのであるが、その効のなかつたのを人び

とは嘆いた。医者もいろいろの手当てを加えたが、金助は明くる晦日の夜明け前にとうとう息を引取った。

最初は霍乱と診立みたてた医者も、後には普通の暑気あたりではないらしいと言ひ出した。何かの食い物の中毒ではないかというのである。二十九日の出先は判っているので、中田屋ではそれぞれに問い合せの使を出したが、残暑の強い折柄であるから、どこでも茶のほかには何も出さなかつた。但し午ひるめし飯はどこで食つたか判らなかつた。延津弥のことは本人も秘密にしていたので、家族も知らなかつた。

閏七月二日の朝五つ時（午前八時）に金助の葬儀は小梅の菩提寺で営いとまれた。その会葬者のうちに延津弥との関係を知っている

者があつて、中田屋の大將が死んでは師匠も困るだろう、お前さんがその後釜を引受けてはどうだなどと、冗談まじりに話していたのが、ふと町^{まち}方^{かた}の耳にはいった。

それからだんだん探索すると、延津弥の一件が明白になつたばかりでなく、金助が当日金龍山下をたずねた事も判つた。まだその上に延津弥もその晩から暑気あたりで寝ているといふのである。但し延津弥の病氣は差したる重態でもなく、二、三日の後は起きられるであろうとの事であつた。

女中のお熊も調べられた。金助と延津弥が同時に発病したのを見ると、あるいはかの牡丹餅に何かの子細があるのではないかと疑われた。お熊もその残りを食つたのであるが、これには別条も

なかつた。ともかくもその牡丹餅は田原町の千鳥から貰つて来たものであるというので、千鳥の女房お兼をはじめ、家内の者一同も代るがわるに取調べを受けた。当日の牡丹餅は他へ分配はしてはならないということになつていたので、お熊が貰いに来た時に、お兼はいったん断ろうと思つたのであるが、千生さんのお指図によつて来ましたというので、かれも辞いなみかねて十一ばかりの牡丹餅を持たせてやつた。それから飛んだ引合いを食つて、千鳥の店ではひどく迷惑した。もちろん千鳥の店の者は何の障りもなかつたのである。

殊におどろいたのは千生の長之助で、自分もどんな巻まき添ぞいを受けるかも知れないという恐怖から、七月二日以来、どこかへ身を

隠してしまった。

七月六日の暗い宵に、千鳥のお兼がそつと金龍山下の師匠をたずねた。お兼は四十三で、年よりも若いといわれていたのであるが、今度の一件と、それから惹ひいて大事のひとり息子の家出の苦労で、わずか四、五日のうちにくふつきり老けて見えた。

お熊は近所の湯屋へ行つて留守であつた。延津弥はきのうから起きたが、髪はまだ櫛巻きにして、顔の色も蒼ざめていた。知合いの仲であるから、お兼はすぐに通されたが、今夜の対面は双方とも余り快くなかつた。お兼の方からまず口を切つた。

「今度はおたがいさまに、飛んだ迷惑で困りました。そこで早速ですが、せがれの長之助はその後にこちらへ参りましたらうか。」

「いいえ。」と、延津弥は情なく答えた。「二十九日から一度も見えませんか。」

「ほんとうに参りませんか。」

「見えませんか。千生さんだって、うつかりこの家へ顔出しも出来ないでしょうから。」と、延津弥は皮肉らしく言った。

「そうですか。」と、お兼はさらに声をひくめた。「世間というのは途方もないことを言い触らすもので……。家の長之助がおまえさんと肚はらを合せて、中田屋の旦那を毒害したなんて言う者がありますそうです……。」

「まあ。」と、延津弥は呆れたようにお兼の顔をながめた。

「よもやそんな事があるとは思いませんけれども。」

「あたりまえですよ。」と、延津弥は蒼ざめた顔をいよいよ蒼くして、罵るように言った。「なんであたしが千生さんと肚を合せて……。お熊に訊いて御覧なさい。こつちが頼みもしないのに、千生さんの方から知恵を貸して、おまえさんの家からおはぎを貰わして……。千生さんにどんな巧みがあつたか知りませんけれど、あたしはなんにも知りませんよ。もしあのおはぎに毒がはいつていて、中田屋の旦那は死に、あたしもこんな病気になつたのなら、千生さんは人殺しの下手人ですよ……。」

「そりやそうですが、世間では……。」

「世間がどういうんですよ。」

「今もお話し申した通り、おまえさんと肚をあわせて……。」

「なぜ肚を合せるんですよ。肚を合せて、ど、どうするっていうんですよ。」

言いかけて、延津弥は何か思い付いたように又罵った。

「まあ、ばかばかしい。それじゃあ、あたしが旦那の眼をぬすんで千生さんと……。まあ、途方もない。馬鹿もいい加減にするがいいわ。あたしも芸人だから、千生さんとひと通りのお附合いはしているけれど、何が口惜くやしくって、あんな寄席の前坐なんぞと……。お前さんもまた、そんな噂を真まに受けて、あたしの所へ何の掛合いに来たんですよ。」

「別に掛合いに来たというわけじゃあないので……。」と、お兼の声もやや尖ってきこえた。「もしやここへ来やあしないかと思

つて……。」

「来ませんよ。来られた義理じゃありませんよ。毒を入れたか入れないか知らないけれども、なにしろあのおはぎを食べたせいで、あたし達はあるな目に逢ったんですから……。つまり、千生さんはあたし達の仇じゃありませんか。」

「そう言われると、お話は出来ませんけれど、あんな人間でも長之助はわたしの独り息子ですから……。」と、お兼は俄かに声をうる湿ませた。「どうしても身を隠さなければならぬ訳があるなら……。まあ当分はどこに忍んでいるにしても、先立つものは金ですから、ともかくも当座の入用にと申って、実はここに十両のお金を持って来たのですが……。」

延津弥は黙って聴いていた。お熊はまだ帰らなかつた。

「ねえ、お師匠さん。おまえさん、ほんとうに長之助の居どころを御存じないのでしょうか。」と、お兼はまた訊いた。

延津弥はやはり黙っていた。小さい庭にむかつた檐のきさきの風鈴が夜風に音を立てているばかりで、二人の沈黙は暫くつづいた。

三

閏七月は誰かの予言どおり、かなり強い残暑に苦しめられたが、二十九日の牡丹餅が効を奏したのか、江戸にはさまでの病人もななく、まず目出たいといううちに、八月にはいつて陽気もめつきり

と涼しくなった。往来を飛びかう赤とんぼの羽はねの光りにも、秋らしい日の色が見えるようになった。それからそれへと新しい噂に追われて、物忘れの早い江戸の人たちは、先々月の末に汗を拭きながら牡丹餅をこしらえたり、買い歩いたりした事を、遠い昔のように思ひなして、もうその噂をする者もなかった。

その八月の二十一日の夜である。小梅の通源寺という寺のそばで、ひとりの女の死骸が発見された。女は千鳥の女房お兼で、手で絞め殺されていたのである。お兼がなんのために夜中こんな寂しい所へ来て、何者に殺されたのか、その子細はわからなかった。

千鳥の店の話によると、お兼はせがれ長之助のゆくえ不明を苦

に病んで、この頃は浅草の観音へ夜詣よまいりをする。観音堂は眼と鼻のあいだの近い処であるが、時にはいつ刻ときぐらいを過ぎて帰ることもある。当人は占い者へ廻ったとか、菩提寺の和尚さまに相談に行つたとか言つていたそうである。但しかの通源寺はお兼の菩提寺ではなかつた。お兼の頸にまかれていたのは、有り触れたかめ瓶のぞきの買ひ手拭で、別に手がかりとなるべき物ではなかつた。

せがれの居どころは判らず、女あるじは急死したのであるから、千鳥の奉公人らも途方にくれた。お兼の兄の小兵衛は千住の宿しゆくで同商売をしているので、それが駄け付けて来て万事の世話をする事になつた。もちろん町内の人びとも手伝つて、まずはこの店相当の葬式を出したのは、二十四日の九つ（正午十二時）であつ

た。その葬式がやがて出ようとする時、長之助の千生が蒼い顔を
してふらりと帰つて来た。

「やあ、いいところへ息子が帰つた。」

人びとはよろこんで、早速かれを施主せしゆに立たせようとしたが、
それは許されなかつた。店先にあつまる会葬者の群れの中に、手
先の一人もとうから入り込んでいて、千生はすぐに引つ立てられ
て行つた。まさかに親殺しではあるまいが、今戸の中田屋の一件
がまだ解決していないので、あるいはその係かかり合あいではないかと
いう噂であつた。

番屋へ牽ひかれた千生は、根が度胸のない人間であるから手先に
嚇おどされて何もかも正直に申立てたので、捕とり方は直ぐに金龍山下

へむかったが、清元の師匠はもう影を隠して、小女ひとりがぼんやりと留守番をしていた。お熊の申立てによると、延津弥も千鳥の葬式にゆくと行って、身支度をして出たままで帰らないという。おそらく田原町まで行く途中、長之助が挙げられた噂を聞いて、千鳥へも行かず、自宅へも帰らず、どこかへ逃亡したのであらうと察せられた。

それから三日目の夜である。橋場の渡し番庄作のせがれ庄吉が、近所へ遊びに行つて、四つよ（午後十時）に近い頃に帰つて来ると、渡し小屋から少し距れた川端に誰かの話し声がきこえた。暗いので顔は見えないが、その声が男と女であることは直ぐに判つたので、年のわかい庄吉は一種の好奇心から足音を忍ばせて近寄つた。

かれは柳のかげに隠れて窺っている、男は小声に力をこめて言った。

「じゃあ、どうしても帰らねえというのか。」

「帰らないよ。誰が帰るものか。」と、女は吐き出すように言った。

「じゃあ、どうするんだ。」

「死ぬのさ。」

「死ぬ……。」と、男は冷笑あざわらった。「きまり文句で嚇かすなよ。死ぬなら俺と一緒に心中してやらあ。」

「まつぴらだよ。誰がお前なんぞと……。あたしは一人で死ぬから邪魔をしておくれでないよ。」

「駄々をこねずに、まあ帰れよ。おたがいに考え直して、いい相談をしようじやあねえか。」

「ふん、なにがいい相談だ。あたしは三日前にここから身を投げるつもりのところを、お前のようなゲジゲジ虫に取っつか捉まって……。」

「そのゲジゲジが留めなけりやあ、おめえはドブンを極きめたところだったじやねえか。」

「だからさ。いつそ一と思いにドブンを極めようとしたところを、飛んだ奴に邪魔されて……。」「と、女は激しく罵った。「いい相談があると瞞だまされて、掃溜はきだめのような穢きたない長屋の奥へ引つ張り込まれて、三日のあいだ、腹さんざん慰み物にされて、身ぐるみ剥

がれて古浴衣一枚にされて……。揚句の果てに宿場女郎にでも売り飛ばそうとする、おまえの相談は聞かずとも判っているんだ。どうせ死ぬと決めた体だから、どうなってもいいようなものだが、あたしはお前のような男に骨までしゃぶられるような罪は作らないよ。」

「なに、罪は作らねえ……。女のくせに人殺しまでして、罪を作らねえが聞いて呆れらあ。よく考えて物をいえ。」

「人殺しはお前じゃあないか。」

その声が高くなつたので、男は暗いなかにあたりを憚はばかるように言つた。

「おれはおめえを救つてやったのだ。」

「救つてくれたら、それでいいのさ。いつまで恩に着せることはないじゃないか。文句があるなら、千鳥へ行つてお言いよ。」

「べらぼうめ。うかうか千鳥なんぞへ面つらを出して、馬鹿息子と一緒に番屋へしよびかれて堪たまるものか。」

さつきからの押問答をぬすみ聴いて、庄吉は男が何者であるかを覚つた。男は近所の裏長屋に住む虎七という独り者で、表向きは瓦屋の職人であるが、商売はそちのけで、ぐれ歩いている札ふ付だつきのならずものである。女は何者であるか判らないが、ともかくもその事件が人殺しに関係しているらしいので、庄吉はおどろいた。殊に千鳥という名が彼の注意をひいた。

こうなつては聞き捨てにならないと思つたので、彼は早々に引

つ返して親父の庄作に注進ちゆうしんした。

かれらの家は渡し場の近所で、庄作は今や一合ごうの寝酒を楽しんでいるところであつたが、それを聞いて眉をよせた。

「そりやあ大変だ。なにしろ俺も行つて様子を見届けよう。」

庄吉に案内させて庄作も川端へ忍んで行くと、二つの黒い影はもうそこに見いだされなかつた。

暗いなかで聞こえるのは、岸に触れる水の音のみである。女は死ぬと言つていたから、庄吉の立去つたあとに身でも投げたか、それとも男に引摺られて帰つたか、それらはいっさい不明であつた。

「お父っさん、どうしよう。」

「さあ。」と、庄作も考えた。「ほか場所ならばともかくも、渡し場近所で何事かあったのを素知らん顔そをしては、後日に何かの迷惑にならねえとも限らねえ。念のために届けて置くがよろう。」

親子は一応その次第を自身番へ届けて出た。

しかもその男も女もすでにどこへか立去ってしまったというのでは、別に詮議の仕様もないので、自身番でもそのままに捨てて置いた。

四

こんにちと違つて、その当時の橋場あたりの裏長屋は狭い。殊に虎七の住み家は^かその露地の奥の奥で、四畳半^{ひとま}一間に型ばかりの台所が付いているだけである。そこへ^{まちかた}町方の手先がむかつたのは^{ひる}明るる日の午ごろであつた。

庄作親子の届け出でを聞いて、自身番でもその夜はそのままに捨てて置いたが、仮りにもそれが千鳥の女房殺しに関係があるらしいというのでは、もちろん聞き流しには出来ないので、明るる朝になつて^{ちよう}町役人にも申立て、さらに町方にも通じたので、ともかくも虎七を詮議しろということになつて、町方の手先は直ぐに召捕りに行きむかうと、虎七の家の雨戸は閉め切つてあつた。こんな奴等は^{ぬすつと}盗人も同様、あさ寝も昼寝もめずらしくないので、

手先は雨戸をこじ明けて踏み込むと、虎七は煎餅蒲団の上に大きい口をあいて踏ふんぞり返っていた。寝ているのではない、頸を絞められているのであった。

川端の闇で虎七と争っていた女が清元延津弥であるらしいことは、読者もおそらく想像したであろう。捕り方もその判断の付かない筈はなかった。延津弥は一旦ここへ引戻されて、虎七の酔つて眠つた隙をみて、かれを絞め殺して逃げたに相違ない。四畳半の隅には徳利や茶碗などどころがっていた。

隣りは空家、又その隣りは吉原へ通かよい勤めの独り者であるので、この二、三日來、虎七の家になんかことが起つていたか近所でも知る者はなかった。しかも前後の事情は庄吉の聴かされた通りで、

彼は延津弥を脅迫して、結局その手に殺されたのは明白であった。捕り方はさらに金龍山下にむかったが、延津弥の姿はやはり見いだされなかった。

中田屋の亭主の死は果して牡丹餅の中毒であるかどうか、それは解き難い疑問であるが、少くもそれから糸を引いて、千鳥の女房お兼と破落戸漢ならずものの虎七とが変死を遂げたのは事実であった。二十九日の牡丹餅が怖るべき結果を生み出したのである。

長之助の千生の申立てはこうであった。

「わたくしの店から持って行つた牡丹餅を食つて、中田屋の旦那は死んでしまい、延津弥の師匠も患つて、その詮議がむずかしくなつたと聞いて、わたくしは急に怖くなって家を逃げ出しました。

師匠の円生のところへ行つて相談いたしますと、ここで逃げ隠れをするのはよくない。自分におぼえないことならば、当分は家にじつとしていて、なにかのお調べがあつたらば正直に申立てろと教えられましたので、その氣になつて引つ返しましたが、どうも不安心でならないので、途中から又逃げました。今更おもえばじゆうじゆう重々の心得ちがいで、それがためにおふくろが殺されるようにもなつたのでございます。

どう考えても、わたくしは馬鹿でございました。師匠の意見に従つて、自分の家にじつとしていればよかつたのですが、いったん姿をかくした以上、なおさら自分に疑いがかかつたような氣がしまして、七月から八月にかけて五十日ほどの間は所々しよしよほう方

々^{ぼう}をうろ付いていました。まず小田原まで踏み出しましたが、箱根のお関所がありますので、熱海の方角へ道を換えて、この湯^と治場^{うしば}に半月ほども隠れていました。それから引返して江の島、鎌倉……。こう申すと、なんだか遊山^{ゆざん}旅のようでございますが、ほかに行く所もなかつたからでございませう。

それから又、相模路から八王子の方へ出まして、そこに遠縁の者がありますので、脚氣^{かっけ}の療治に來たのだと嘘をついて、暫くこの厄介になつていました。その化けの皮もだんだん剥げかかつて來たので、そこにも居たたまれなくなつて……。まあ、半分は逐^おい出されたような形で、幾らかの路用^{ろよう}を貰つて江戸へ歸つて参りました。

故郷の浅草へ帰りましたのは、八月十六日の晩で、それから真っ直ぐに家へ帰ればよかったです。なんだかしきい閼いが高いので、ともかくもその後の様子を訊いてみようと思ひまして、金龍山下の延津弥の家へこっそり尋ねて行きますと、師匠はよく帰つて来てくれたと喜んで、すぐに二階へあげて泊めてくれました。そして、四、五日厄介になつていゝうちに、延津弥が申しますには、わたしも中田屋の旦那に死に別れて心細い。どうぞこれからは力になつてくれと口説かれまして……。まあ、夫婦のような事になつてしまいました。延津弥はわたくしを家へ帰しません。

そのうちに判りましたのは、延津弥がわたくしのお袋をだまして、三十両ほどの金を巻き上げている事……。延津弥はおふく

ろにむかつて、こんなことを言っていたそうでございます。中田屋の旦那を毒害したなぞは、まったく覚えのないことだが、実は千生さんと私とは前々から深く言いかわしている。中田屋の一件とは別べつ口くちで、千生さんは少し筋の悪いことがあつて、当分は身を隠していなければならぬ。その隠れ家がは知れているが、今すぐに逢わせるわけには行かない。千生さんも小遣いに不自由しているようだから、金はわたしから届けてあげる。こう言つて最初におふくろから十両の金を受取りまして、それから五十日のあいだに三両五両と四、五たびも引出しましたそうで……。それは延津弥が自分の口から話したのですから嘘ではございませんまい。

わたくしもそれを知つて、どうもひどい事をすると思ひました

が、なにしろ延津弥とは夫婦同様になつてしまつたのですから、今さら開き直つて女を責めるわけにも参りません。八月二十一日の晩に延津弥は日本橋の方へ行くといつて家を出まして、四つを過ぎては歸りません。どうしたのかと案じていますと、九つ（十二時）を過ぎてようよう歸つて来ました。わたくしは外へ出ませるので、世間の噂を聞きませんでした。おふくろはその晩、小梅で殺されたのでした。わたくしが初めてそれを知つたのは二十三日の午頃で、その翌日が千鳥から葬式の出る日でございます。延津弥はわたくしに向つて、もう隠れている場合ではない、早く歸つてお葬式の施主に立てと申しますので、わたくしも思い切つて歸りますと、直ぐに御用になつたのでございます。何事もわた

くしの不届きで、重々恐れ入りました。」

これに因よつて察せられる通り、千生はよくよく意気地いぐじのない、だらしない人間で、最初は身に覚えのない罪を恐れ、後には女にあやつられて、魂のない木偶でくの坊のように踊らされていたのである。

事件の輪郭はこれで判った。その以上の秘密は延津弥の自白に俟まつのほかはない。しかも延津弥はその後の消息不明であった。

きびしい町方の眼をくぐって、遠いところへ落ち延びてしまったのか、あるいは自分でいう通り、隅田川に身を沈めて、その亡なきが骸らは海へ押流されてしまったのか。それは永久の謎として残されていた。

前後の事情によつて想像すると、延津弥は千生の母に対して最初は反感を懐いだいていたが、十両の金を持つて来たというのを聞いて、俄かに悪心をきざして、それを巻き上げることが案出したのであろう。それは殆ど明白であるが、千生の母をなぜ殺したかということに就いては、明白の回答は与えられていない。

最初のうちは千生の母もだまされて、三両五両を延津弥の言うがままに引出されていたが、後にはそれを疑つて是非とも我が子に逢わせてくれと言ひ、そのもんちやく扨着から延津弥が殺意を生じたのであろうと解釈する者もある。しかし八月二十一日の頃には千生を自分の家に隠まつていたのであるから、どうしても逢わされないという事もない筈である。あるいは母を殺して千生に家督を

相続させ、自分も千鳥のおかみさんとして乗込むつもりであつたらうという。その方がやや当つているらしいが、それにしても母を殺すのは余りに残忍であるように思われる。

次は延津弥と虎七との関係である。小梅の寺のそばで、延津弥とお兼とが何か争つてるところへ、虎七が偶然に通りあわせて、延津弥を助けてお兼を絞め殺し、それを種にして延津弥をいろいろ脅迫していたらしい。生きていれば死罪又は獄門の罪人であるから、女の手で葬られたのは未だしもの仕合せであるかも知れない。

千生は自分の不心得から母が殺されるようになったので、重きざいか罪科いにも行わるべきところ、格別のお慈悲を以つて追放を命ぜら

れた。

七月二十九日の牡丹餅を食った者は江戸中にたくさんあったが、これほどの悲劇を生み出したものは、この物語の登場人物に限られていた。

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の夢」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年4月20日初版1刷発行

初出：「富士」

1936（昭和11）年7月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：花田泰治郎

2006年5月7日作成

2007年5月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

廿九日の牡丹餅

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>